参画だより

No.81
令和8年３月発行
弘前市企画部企画課

弘前市出前講座

「出前講座」とは

出前講座は市民の皆さんが自主的に開催する学習会などに、市の職員を派遣する制度です。市民の皆さんが気になっている市の制度や取り組みなど、市政の情報を積極的に提供して市政へのご理解をいただくとともに、市政についてともに考え、参加していただくことを目的にしています。

市内に在住、在勤、在学する5人以上のグループが対象で、企業の職場研修や学校の授業などにも利用できます。

男女共同参画に関する出前講座

分野	講座名	主な内容	時間の目安	対象年齢層	担当課等
市政	男女共同参画の取り組みについて	「一人ひとりが互いを尊重し合い心豊かに暮らせるまち弘前」を基本理念とした男女共同参画プランや、その実現に向けた取り組みについて説明します。	60分	中学生以上	企画課
市政	「知る」から始める性の多様性	性的マイノリティに関する用語やパートナーシップ宣誓制度をはじめとする市の取り組みについて説明します。	30～60分	中学生以上	企画課

※出前講座は、市政への要望や苦情などをお引き受けするための場ではありませんので、あらかじめご了承ください。

お申し込み方法等詳細についてはこちらから

ひとにやさしい社会推進セミナー

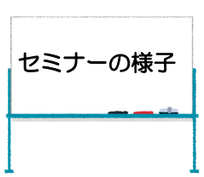
このセミナーは、 男女共同参画社会の普及・啓発を行い、性別に関わらず、誰もが活躍できる環境づくりを目指すことを目的に開催しました 。

働き続けたいと思える職場づくりのポイント～真の定着とは～

令和８年２月１８日に川村啓之社会保険労務士事務所 代表 川村 啓之 氏を講師に、「働き続けたいと思える職場づくりのポイント 」と題してご講演いただきました。

初めに、人口減少・労働力減少の実態について具体的な数値を示し、人手不足が進む中で、労働者に選ばれる企業になるためにどうしたらよいのか具体例や企業が取り組める方法について 、わかりやすくご説明いただきました。

当日は８名にご参加いただき、 「具体的な事例があり、とても参考になった。 」「現状活かせる内容が多かったので参考になった。」 などの感想がありました 。



さんかくひとりごと

～結婚にまつわる話～

結婚について特集したテレビ番組の中で「ロジカルラブ」という言葉を初めて聞いた。恋愛のときめきよりも、価値観や生活設計の一致を重視し論理的に整理することで、相手をよく知ってから好きになるという考え方のようで、特に現代の若者やアラサー世代に注目されているとか。結婚生活を始める前に実現したい人生の目標を持てる利点があるようだ。

この１年間で結婚した夫婦にどのようにして出会ったのかを聞いたところ、マッチングアプリと答えた人が３割超えだったという民間のデータが紹介されていた。出演していたアラサー世代の男女は、自分たちの周りではごく普通のことだと答えていたことに納得。

番組では若い世代の会員数が増えているという結婚相談所にも注目していた。結婚の意思を持つ人が登録しているので、１年未満の成婚率が高いとのこと。人生設計の中に結婚があるのならば考え方や価値観を共有できる人と結婚したい。結婚までの期間に多くの時間を割けない。自分の条件により合う人と出会いたい。アプリだと偽情報が心配などの考えから、信用できる結婚相談所を選択した利用者の話に、なるほどと感じた。実際に結婚したカップルの話を聞いて、こういう結婚のあり方も納得できる。

また自分の名前を変えたくないという思いから、あえて法律婚ではなく事実婚を選択したというカップル。そもそもなぜ結婚しなければいけないのか、必要があるのか、結婚は自分に向かないと思う理由から結婚しない人たちもいる。結婚するのは当たり前、結婚して一人前と考えられていた時代もあったが、結婚に対する考え方も多様化している。当事者の思いや選択を尊重し、あたたかく見守れる社会でありたいと思う。（森）

長年親交のあった人の最期を見送った。知り合った頃はすでに認知症が進み、どのような人生を送ってきたのか推し量ることが難しかった。身寄りがなく結婚、出産の経験がなかったようだが、一緒に暮らしていた人をオヤジさんと呼んでいた。いきさつは分からないがオヤジさんとは事実婚だったようだ。

桜やチューリップの花を愛でながらオヤジさんや幼いころの話を聞かせてくれた。

幸せな人生だったと思いたい。さようなら！

ボランティア編集委員の編集後記

朝起きると真っ先に見るのは窓の外、毎日の雪に肩を落とす。少しの晴れ間久々の女子会　車は大揺れ、後部座席の３人のおかげで尻は振らないが、ガタガタ道は大変「舌、噛みそう」と大笑い　運転の私は必死でハンドルを握る。帰りは道路が心配でラーメン食べて、みんな帰った。最短の女子会だった。（梅）

知り合いの夫婦が昨年ほぼ同時期に難病を発症した。妻は夫の食欲不振を心配し、夫は妻を残していくことに苦悩する。勝手に自分の寿命を決めつける夫にかける言葉もない妻。最近まで元気に暮らしていたのにと私が残念に思うのだから本人たちの戸惑いはいくばくかと思案に暮れる。（森）

♫春よ来い 早く来い 歩き始めたみいちゃんが 赤い鼻緒のじょじょはいて おんもへ出たいと待っている♬
大雪でクタクタになっていると無意識に出てくる鼻歌で童謡！幼いときに習った歌が自然と出て心を和ませてくれる。（のん）

※参画だよりは３名の市民ボランティア編集委員にご協力をいただいて発行しています。

■編集発行
弘前市企画部企画課ひとづくり推進室　〒036-8551　弘前市大字上白銀町１番地１
電話：0172-26-6349(直通)　FAX：0172-35-7956　E-MAIL：kikaku@city.hirosaki.lg.jp

「知る」から始める性の多様性セミナー

弘前市では、性的マイノリティの人が安心して暮らせる環境整備を推進するため、周知啓発事業として企業向け・市民向けのセミナーを実施しています。

「性の多様性をめぐる教育の課題と対応」（企業向けセミナー）

令和７年１０月７日、渡辺大輔氏（埼玉大学ダイバーシティ推進センター准教授）を講師に、性の多様性に関する基礎知識について学ぶとともに、子どもたちの発達ニーズ（気づき、いじめ等）、学校における合理的配慮や支援の方法について、具体的な事例を交えながらお話しいただきました。

企業向けセミナーの様子

当日は、２５名にご参加いただき、「たくさんの思い込みに気付くことができた。今後子どもたちと関わる際、自身や他者のことを考える際に活かしていきたい。」「性の多様性だけではなく、家族の多様性など生きていく中でいろいろなことに対して多様性を考えていきたいと思った。思い込みはまだまだあるが、思い込みがダメなのではなく、そのことに気づくことが大切なのだと感じた。」などの感想がありました。

性の多様性について教育現場でも理解が広まり、当事者の方が、安心して暮らせる地域となることを期待しています。

※本セミナーは、後日アーカイブ配信を予定しています。準備が整い次第、弘前市HPや広報ひろさきにてお知らせしますのでご確認ください。

「LGBTQ＋と故郷～地元を離れて見えたもの～」（市民向けセミナー）

令和８年１月１９日、青森県を拠点に性の多様性を知ってもらうための活動を行っているサークル「スクランブルエッグ」の皆さんなど、当事者の方をゲストにお招きし、多様な性に関する用語などの基礎的な部分や、地元を離れて暮らす当事者の方から、それぞれの体験や生き方、地元に願うことなどをお話ししていただきました。

市民向けセミナーの様子

当日は、１４名にご参加いただき、「当事者の生の声を聞くことができ、とてもためになった。」「セミナー情報はこれからも発信していって欲しい。」といった感想がありました。

今後も理解促進を図ることで、アライ（支援者・理解者）の方の輪を広げていきたいと考えています。

多様な性に関する「LGBTQ交流会」

青森県を拠点に性の多様性を知ってもらうための活動を行っているサークル「スクランブルエッグ」、当事者の居場所づくりを行っている「そらにじあおもり」と弘前市の共催により、多様な性に関する「LGBTQ交流会」を令和７年９月２６日、令和８年２月１４日にヒロロ3階多世代交流室にて開催しました。

このイベントは、性的マイノリティの当事者やアライの人たちが交流しながら、互いに情報交換や相談をしたり、理解を深めたりすることを目的に開催しています。

交流会では当事者の方やその周辺の人、お話を聞きたい人などが参加してくださり、趣味や好きなものについて語り合ったり、自分の抱えている気持ちをお話ししたりと、様々な話題で交流しました。

今後もこのような場やセミナーなどを開催していく予定です。

弘前市HPや広報ひろさきにて随時お知らせいたします。

きらめく人、ときめく心

☆今回のきらめく人・ときめく人は、行動力でビックリ！！長内　幸之修さん

長内　幸之修　さん

〇職業は農業

一昨年「新鮮なりんごや野菜をダイレクトに消費者へ」をコンセプトに（株）一華ベジフルを立ち上げた行動力のある人である。他にも青森県りんご共同防除連絡協議会会長として、青森県内を回って活躍している。

お孫さん２人（小学生、園児）のいる年齢になっても、前進の人である。

〇30年のボランティア

男の子３人のパパとして、若い頃は長い間PTA会長をしていた。その関係か地元の小学校で平成８年から、５年生に“お米の出来るまで”と題して体験学習を行っている。初めの１時間講義した後、田植えは自ら田んぼに入り、やって見せる。稲刈りも、稲わらで縄をなってXマスリースを作っても同じ教え方。数年前は助手がいたのだが、今は一人で教えている。

〇スポーツ万能

若い頃、冬になると大鰐スキー場でインストラクターをしていた。メガネ跡くっきり真黒日焼けがトレードマーク。野球、バトミントン、スキーと地区のスポーツ大会代表選手として参加、貢献、現在は地区の体協の副会長である。また弘前市消防団豊田地区団長を近年まで務めた。

〇社会貢献

ビックリするのはこれだけ忙しい人が、保護司（罪を犯した人のサポーター）でもあることだ。対象者は今まで20人以上、途切れることは無いようである。一人月２回以上、面接する更生保護の仕事である。みんな罪も性格も違う人たちに対応している事は、この人の人生経験で紡いできた懐の大きさだと思う。地域の人は言う。『いつ会ってもニコニコ顔で、暗い顔のコウノシュウさん見た事がない』と。きらめいている人なのである。

（梅）

わたしと本 『涙の箱』

2024年にノーベル文学賞を受賞した作家ハン・ガンが描く、大人のための童話。

おじさんはこれまでにいろいろな種類の涙を集めてきました。玉ねぎの匂いを嗅いだ時の涙、あくびをした後に目じりに溜まる涙、腹が立った時に流す涙、嘘泣きした時の涙、会いたい人に会えない時に流す涙、辛い経験をして、やがて涙も涸れてもっともっと時間が経った後に再び流す涙…。それぞれの涙に色がついているのも特徴的です。これらを特殊な技法で固体化したものを箱に入れて必要な人に売っています。おじさんは「純粋な涙」を流す子どもの噂を聞いて探していました。ある村にみんなが予測も理解もできないところで涙を流す不思議な子どもがいました。その子どもの自分が泣いていることすら気づかずに流す涙。特別な理由はないけれど、この世のすべての理由で流す涙は、世界で最も美しい「純粋な涙」そのものでした。

著者：ハン・ガン
訳　：きむふな
発行：評論社

自然の儚さや尊さに涙するのは、実は大人も同じなのです。しかし、同じものを見てもそれをどう感じるかは、人それぞれ。感じ方はその人の生き方そのものが反映されているのではないでしょうか。世の中にはあまりにも悲しい出来事を経験したショックから、心の奥底に溜まっている涙を封印してしまった人もいるでしょう。泣きたくても泣けず笑顔を絶やさない人もいるでしょう。表面上は笑っていても、影では泣いている人もいるでしょう。そういう人に「純粋な涙」を売り、「影の涙」を解放してあげることなのです。重症化する前に涙を流すことが必要なのです。

ハン・ガンは難しい言葉はあまり使わず、文章は簡潔で端正でありながら美しく、不思議で神秘的な物語の世界がより鮮やかに生まれ変わった作品です。

「時おり、予想外の瞬間に、私たちを救うために訪れてくれる涙に感謝する」

―ハン・ガンのことばより―

（のん）